

パンデミック

この2020年は、皆様にとっても、そして人類にとっても、決して記憶と記録から消失することがない一年となることでしょう。一年前、誰がこの世界的危機を予見することできたでしょうか。新型コロナウイルスの蔓延がもたらした人類の危機は、人類の叡智に無限の可能性を信じていた私たちに「この世界は、どこまでも矛盾と不合理と非条理でしかない」という現実を私たちに突きつけ、人間の生命が残酷的なまでに儚き存在であることをあらためて実感させました。釈尊が人間の苦しみを「生・老・病・死」として捉え、この世界に生を享けた存在は、必ず老いと病気と死を経験しなければならないという恐るべき真理の意味が、このような時代だからこそ、私たちの心に痛烈なメッセージを与えます。

この視座で人類の歴史をひもとくと、医学と医療の発展はある意味で疫病との戦いの結果でもあり、人類は常に「生・老・病・死」を自らの科学と技術のもと克服してこうようとしてきました。しかし眼に見えないウィルスの存在は、百年に一度は人類に対して毒牙を剥き出しにして、人類の存続を危機的にしてきました。新型コロナウイルスがやや落ち着いた傾向にも見受けられる九月初旬はまだ「二回裏、人類の攻撃」でしかなく、九回裏試合終了までの道のりはまったく先も見えず、予断も許さない状況といえるでしょう。

さて人類と疫病の戦いを描いた本は多数あります。たとえば加藤茂孝の『[人類と感染症の歴史](#)』（2013年、丸善出版）および『[続・人類と感染症の歴史](#)』（2018年、丸善出版）は、人類と感染症の関わりを克明に記録しています。ウィリアム・H. マクニール『[疫病と世界史](#)』（上・下、2007年、中公文庫）は、初版原著から四十年という時間を経過していますが、人類の移動が疫病の流行に密接に関与しているという指摘は、今回の自粛政策の経験から身を以て理解することができます。

また今年のベストセラーにもなっているカミュの『[ペスト](#)』（1969年、新潮文庫）は、現代の医療現場の再現のような内容にも読めるかもしれません。ペストについては、村上陽一郎の『[ペスト大流行—ヨーロッパ中世の崩壊](#)』（1983年、岩波新書）も、ペストとヨーロッパ社会との関わりがリアルに描かれており、今の新型コロナウイルスと経済の問題が実は歴史的にも根深い問題であることを実感することができます。

また百年前に日本を襲ったパンデミックであるスペイン風邪に関する詳細な記録は、『[流行性感冒—「スペイン風邪」大流行の記録](#)』（2008年、平凡社東洋文庫）に整理されており、現代のウィルスへの対抗策が実は百年前と大差ないことに驚きを隠し得ません。

石弘之『[感染症の世界史](#)』（2018年、角川ソフィア文庫）は、比較的最近の一冊ですが、この地球上の生物連鎖の最上位に位置する人類が、ウィルスという極微的存在によって危機に追いやられる状況を詳細に解説しています。このウィルスとの共存という視座では、山本太郎『[感染症と文明—共生への道](#)』（2011年、岩波新書）も参考となる一書です。個人的にパンデミックを取り扱った本で興味深かった一冊は、見市雅俊の『[コレラの世界史](#)』（1994年、晶文社）です。本書はコレラサイドから人類を見た論点となっており、人類なしに生存でき得ないといわれるウィルスの存在に、何かしらの意志を考えてしまいそうにもなります。

ウィルスや疫病を取り扱った本は、まだまだ多数あります。これらの本を何冊か手に取ると、映画『パトローバー2』の劇中における「この街では誰もが神様みたいなもんさ。いながらにしてその目で見、その手で触れることのできぬあらゆる現実を知る。何一つしない神様だ」というセリフのまま、自身の存在を神と思い込んでいる人類に対して、地球という本当の神が、時折にもたらすシグナルがウィルスの存在ではないかと想像してしまいます。